

は發見せられない。即ち人文主義的教育理想も其の主潮は矢張り道德的人格の完成に置かれたのである。彼のピットリノ、ヴェギウス、エラスムス、ウインフェリング、アスカム等、當時著名なりし思想家教育家の教育意見中、明かに唱導せられてゐる所である。唯だ基督教主義は神本的、未來的、禁慾的に道德を考定せるに反し、人文主義は、人本的、現實的、自由主義的に道德を考定せるの差あるのみである。勿論此の道德的品性確立に對しての、陶冶の方法に於ては、兩者は全く相反する。

宗教改革に依つて唱へ出されたる新教的教育の全部は、ルーテル、ツウイングリ等に依つて代表せられてゐる。ルーテルの教育理想は、國民全部をして眞の信仰的生活、即ち神的生活を營ましむる事に在つたのである。謂ふ所の神は、基督教的の神、即ち愛仁の無限的存在としての神の意である。宗教の改革は、神の内容まで改革されたのでは無く、唯だ神的生活の様式の改革に過ぎないのである。ツウイングリの教育目的は、人をして神を認識せしめ、以て宗教心・道德心を養成するに在つたのである。見れば新教的教育も、道德的教育であつたのである。

十七世紀の教育はベーコン、ロック、コメニウス、モンテーニュ、等に由つて代表されてゐる。一般的に言へば、十七世紀の教育は、實利的教育の潮流が高かつたが、然し決して道德的教育思想が存

在しなかつたのではない。殊にモンテーニュ、コメニウス等の思想中には、強い程度に存在してゐたけれども十七世紀教育の特色は寧ろ實利の一面の陶冶に在つて、人格の崇高なる意義の發揮は忘れられんとしたのであつた。

十八世紀啓蒙主義の教育は、理性主義的教育である。ルソー、バゼドウ、カント等に依つて代表せられてゐる。一般に十七世紀の實利的、功利的に傾き、道德的教育の輕視せられたる形勢あるもカントは實に道德主義の教育を極端に高唱した人であつた。

十九世紀初葉の新人文主義的教育は、ベスタロツチを代表者とする新人道的教育（人文主義の人道的教育に對してかく云ふ）、ヘルバルトを主腦とする道德的教育、の二流派を主潮とする。ヘルバルトの教育説は、カントの教育説の如く、眞正なる道德的教育であつた。然しベスタロツチの教育説は一般的陶冶、天賦能力各方面の調和的發達を説く所より考ふれば、道德を廣義に解したる時の道德的教育であると謂ひ得るのである。殊にベスタロツチの教育的生活は、實に道德的生活であつたのである。故に十九世紀初葉は十七・八世紀の比較的道德的陶冶を輕視せる、實利主義、功利主義の教育の反動として表れたる、道德的教育なりと斷ずることが出来るのである。

十九世紀中葉に至つて、世は自然科學の世界、物質主義の時代と化し、教育も此の立場から律せられて、道を説くは迂遠にして、生活に不必要である。寧ろバンを得可く、美衣を得可きが如く、教育するを必要とするに至つた。スペンサーの教育説は最も好き代表である。然し種々なる理由よりして國家的、社會的見地等より、國家的道徳、社會的道徳等の特殊なる意味での、道徳教育を唱へたものは在つた。單なる形式的なる道徳的といふ事が、確實なる内容を得たものと考へてもよい。

十九世紀終末より現今に至る迄の間には、種々なる立場より、種々なる教育説が提唱せられて來たが、中に於て特に明瞭に道徳主義を標榜して、自然的個人主義、主知主義的唯物主義、等と強烈に太刀打してゐるのは、ブツデ、フェルスター、或はリンデ等の人格的教育派であり、其中でも殊に道徳のみに據る者は、フェルスター教授である。

以上要するに、道徳的教育の思想は、恐らく教育の中心思想であつて、教育即道徳教育とまで考へ得られた時代もあるのである。故に如何なる人、如何なる時代に於ても、苟も人を人にまで陶冶し育成するといふ教育を考ふる以上、必ず道徳的陶冶の存じないのは無いのである。更に此の稿の冒頭にも述べたる如く、道徳を廣義に解し、人の生活の全面的理想的狀態の意に解する時には、凡ての教育

凡ての陶冶は、皆道徳的教育となり得るのである。然し今迄並べて來た道徳的教育の意味は、此の意味のものではない。實利、快樂、審美、等に對立する意味の道徳を理想させる教育學說である。

## 第五 美的教育學說の歴史

美的教育學說とは、美を以て最高原理とする教育學說である。一に藝術的教育學說とも言ふ。更に言はんか、美的人格を以て最高價值の人格となし、これを得せしむることを教育の目的とす教育學說である、かゝる教育學說は如何に發達變遷し來れるか。次に之を述べる。

希臘時代に於て既に美的教育の思想が高調されてゐるのを見る、由來希臘人は其の本性に美的調和的傾向を持つてゐる。希臘思想の主潮は善即美に在つたので、教育に於ても此の思潮が表れ、教育即美育の如き勢を示した。希臘教育が音樂體操詩文を中心として行はれたのは明かな事實で、音樂詩文は心性の美的調和發達を目的とし、體操は身體各部の美的調和的發達を目的として行はれたのである更にこれ等を渾一的に行ふ事に依つて、心身が美に依つて統制され、心身が調和的に圓滿にならん事即ち心身の美的調和完成を目的として行はれたのである。かくして希臘の教育は美を、心身の調和即

ち均齊に求むる所の美的教育となつたのである。

羅馬及び中世文化の暗黒時代に於ては、美育は衰滅して、一は羅馬人の特性より發する實際主義、政治主義教育が榮へ、一は禁慾的、現實否定的の神本的教育であつた。然るに中世の宗教時代は文藝復興に依つて、新しい文化時代にまで進展した。

文藝復興とは、希臘文化の再現の意である。文藝を復興せんとする其の根本傾向に於て、既に中世の宗教時代と全く行き方を異にしてをる。現實的・唯美的・自然主義的のものである。此の根本基調が美的性質のものであると共に、再現して來るものは希臘の調和的的思想、文化である。何ぞ美的たらざるを得んやである。人文主義は實に美尊重主義である。殊に文藝復興の策源地たる、伊太利の人文主義は美一點張の主張であつた。文化の基調が既に唯美的なる人文主義時代に於て、教育のみ超然たるを得ざる可く、教育も亦美的教育となつたのである。希臘時代の美的教育主義が、中世紀基督教の試練を経て、茲に新装と新意義を持つて、希臘時代に於けるよりも精練せられた意味に於て、一層強く發現せるものと考へられるものである。十七八世紀の實利主義、經驗的主知主義、合理主義は、一も二も無く唯美主義を排斥し去つて顧なかつた。蓋し十七八世紀の主知主義は根本に於て、主

情主義たる唯美主義と兩立し調和し得ざるものだからである。蓋し合理を至上とすのと、感銘憧憬を要求する事とは、合致しないものがあるからであり、實利と實利以外とは全く方向を異にするからである。然るに實利主義經驗的なるが故に、淺膚なる理性主義、合理主義には、到底人生の永住的理想は發見し得られない。加ふるに實利主義、經驗主義は、感覺的刹那主義となり、到底文化の主義として價值無きものとなり終りたるに由り、茲に新しき文化の世界は打開せられた。それは十九世紀初葉の新人文主義、ロマンチズムの思想である。

新人文主義の思想は、極端なりと考へらるゝ程の、唯美的思想である。美至上主義である。蓋し新人文主義の思想に由れば、眞なるが故に善美なるに非ず、美なるが故に眞、善、である。となすからである。隨て此の時代の教育は美育を至上となす教育であつた。教育ならんが爲めには、美育ならざる可らず、教育即美育、美育即教育となしたのである。此の時代の代表思想家としてシルレルゲートを挙げ得るが、彼のシルレルの美育論は德育よりも美育を包括的にして上位なるもの、と主張するものである。希臘の調和尊重の美育主義、人文主義の宗教を對者としての美育主義は、新人文主義に至つて、美以外のものを全く包括して、其の上に高き意味の、美育至上主義となつたのである。十九世紀

中葉は十七・八世紀の實利主義、理性主義が、自然科学による世界の物質界の開明に隨伴して、自然科学的・生物學的・自然主義的・實證主義的に表れて來た。メスの光と顯微鏡、鐵機械のキシリと煤煙赤煉瓦の工場と労働者、に依つてシンボルせらるゝ所の文化が、潮の満つるが如く瀰漫して、茲に唯物的文明・機械的文明・自然主義文明、隨て經驗的理知萬能の文明、自然主義の文明の大華が、文明を飾つたのである。然るに此の思想此の文化は、十七・八世紀の思潮及び文化が直ちに新人文主義、ロマンチズムに置換へられたと同様に、それ自らに胚胎する根本的弱點たる自然主義・經驗主義・唯物主義に依つて、これに反對なる所謂新理想主義（ネオロマンチズム）なるものを導き出したのである。自然科学のメスの爲めに、唯物主義の肉魂の爲めに、全く奈落の底に一蹴し去られて顧みられなかつた藝術思想、美的生活主義は、此のネオロマンチズムの潮に乗つて、再び強く文化の表面に表れて來たのである。

新理想主義、ネオロマンチズムは原則的に、十九世紀中葉の唯物的生活、自然主義的生活、實用主義的生活に反對するものである。十九世紀中葉の思潮に於ては、美乃至藝術は無價値或は有害として排斥せられてゐた。若し美乃至藝術に價値を認むる可すれば、美乃至藝術なるが故に尊しとなすに

非ずして、唯物的生活を何等かの意味で満足せしめ、唯物的實用主義に、何れかの點で貢獻關與するが故であつたのである。此の關係を今圖畫科に就いて見るに、希臘時代に在りては他教科中に存在してはるが、圖畫の價值を他物の方便とは見なかつた。十九世紀初葉新人文主義者ウエルヘルム・フオン・フンボルトが藝術的教科として、獨立的に價值を與へんとしたが、未だ顧られなかつた。然るに不思議にも十九世紀中葉に至つて、教科として圖畫が獨立したのである。これを唱へたのはペーター・シュミツドである。然るに此の時の立場は、圖畫を美的教科として取入れたるに非ずして、正確なる理解力確實なる觀察力を練習するといふ意味で取入れられたのである、即ち理知主義、實用主義の基礎の上から價值ありとして取入れられたのである。かく十九世紀中葉の思想及文化は、理知唯物的實用中心のものであつたのである。然るに新理想主義は全くこれに反し、美なるが故に美を尊重するといふ思潮なのである。新理想主義の思潮は、新理想主義の哲學を背景としてある。新理想主義の哲學とは、新カント派を中心とし、エナのオケイン等の思想を合したるものである。而して思潮の根本を従來の如く主知主義に置かず、主情意主義に置き、唯物論的傾向を棄てて、唯心論的立場に立つものである。然し科學等の經驗的一面、唯物的一面を全然度外視するものでは無く、却つてこれを取

入れて、其の上に高からんとするものである。主情意主義なるが故に、發表創作を重んじ、人格主義となるものである。發表創作の重視と人格主義とは合して、茲に美術藝術の價值を人格的に至上なるものと見るに至るのである。更に唯物的生活の弊として、文化が唯物化し感覺化し、爲めに人生の理想面は全く破棄せられたるに醒め、此の文化を救済するには、人格の物格化したるを反對に精神化するに在る。然るには美の尊重、藝術の振興獨立を計る可きである。と考へるに至つたのである。これが藝術振興の重大原因となつたのである。次に注意すべきは、現代の經濟生活の眞の振興は、決して美術藝術と反換すべきものでは無く、眞の工藝品は美の規範に依つてのみ生産せられ、美に反するものは工藝品として無價值である。故に工藝の獨立、生産の振興、國民經濟の發展を爲すには、必ず美を尊重せざる可らず、美なるが故に生産品として有價值なり。さなす經濟上・生産上の唯美主義である。此の思想は歐洲殊に獨逸等に於て榮へ、美尊重文化を形成した一原因となつてゐるのである。かゝる意味の輓近の唯美主義は、美なるが故に美なり。藝術は藝術の爲の藝術なり。眞善ならずとも美は美たり得る。となす極端派さへ産んでるのである。かゝる基調の文化の内に立つ教育は必ず美的教育を産まねばならない。而し美的教育を尊重するが故に、美的教育は肥大成長せねばなら

い管である。かくして美的教育思潮は明かに現代の教育思潮の一大中心を爲して來たのである。これを代表するものは、ラスキン、リヒトワルク、ランダ、ウエバー等である。而して此の藝術的教育の思潮は、大戦後の非軍國的平和主義、個性尊重自由主義たるデモクラシー等の思想と合體混和して愈々強勢たらんとしてゐるのである。

## 第六 宗教的教育學說の歴史

宗教的教育學說は神を以て教育最高の原理となし、教育上の理想を神に置き、神的人格を以て理想的人格となし、かゝる理想的人格を得せしめん事を教育究竟の目的となす教育學說である。一言にして盡せば教育を以て宗教の爲めの事業なりとなす教育學說である。教育學說は目的原理と其の目的を達成する爲めに當然爲さざる可らざる所の、方法原理との二大方面より組織せられるものである。宗教的教育學說も、一種の嚴乎たる教育學說なるが故に、又此の二方面より組織せられてゐる。即ち教育目的としては神乃至神的人格を置き、神乃至神的人格を人間の内部に表象し實現する爲めには、かくかくの手段方法に依る可きである。となしてゐる。然し茲に注意せねばならぬのは、宗教的教育學說は目的論に於ては、必ず神乃至神的人格を置据へるが、其の方法論に於ては常に宗教的方法即ち祈禱・讚美歌・又は讀經・御祈り等の方式にのみよる可しと規定しないことである。或は知的開發をな

し、或は社會的訓練を爲し、以てその目的を達成せんとするものもあることである。然し宗教的教育である以上、教育究竟の目的、究竟原理を神乃至神的人格に求めてゐることは、如何なる人の宗教教育學說にも、共通普遍であることは言を俟たない。

宗教的教育の一般的發達を考察するに、如何なる未開人にも宗教的教育は存在したと考へられる。又現代に於て文化の程度高き民族が嘗て未開時代に在りし時代にも、宗教的教育は行はれたと考へ得る。其の證明は如何といふに、此の事の證明は三個の事實證明が成立すれば自ら證明せられて來る譯になる。三個の事實とは、未開人間に宗教ありや、未開人生活に教育ありや、兩者若しありませれば其の宗教と其の教育とは如何なる關係に在りしやの三問題である。故に三個の事實の證明とは、此の三問題の正常なる解答である。隨て此の解答其の物を全體的に綜合して見れば、それが即ち未開人の生活に宗教的教育が存在したか否かの證明となるのである。

未開人に宗教ありや。宗教は宗教的要求に依つてのみ發生し維持發達される。未開人に宗教的要求が存在すとなし得れば、必ず宗教が存在したと考定し得る。何となれば宗教的要求とは二個の存在で無いからである。即ち宗教的要求は宗教そのものの主觀的見解で、宗教は宗教的要求の客觀的見

解以外のもの無いからである。未開人に宗教的要求ありや。宗教的要求は先天的又は先驗的のものである。何となれば、宗教的要求は形而下的には、人間の本能より發するものとして先天的性質のものであり、形而上的には、人間本性の先驗的内部的希求であるからである。更に説明せんか形而下的には、自己保存の本能に根據し、社會的本能に關連して發するものであり、形而上的には、人間内部の斷ち得可からざる、理想要望・自我創造の先驗的原理に依りて發生するものである。これを合して先天的に又先驗的の内部要求と言ふのである。既にかくの如し、未開人も人間たる以上、宗教的要求の存在せるは明である。故に宗教は彼等にも存在したと考定し得るのである。又他の證明法に依つても證明し得。開化せる民族に宗教的要求即ち宗教の存在するを許す以上、未開人にもこれの存在を許さねばならない。何となれば無より有は生ぜざるに共、人間生活の進化過程に於ては、前時代に無なるものが、今の時代に有さなるとは考へられない。潛勢的にか顯勢的にか必ず存在してゐたもののみが發達進化し得る譯である。故に現代人に宗教的要求の存在するを許す以上、未開人にも何等かの意味での宗教的要求の存在を許さねばならないのである。所が少くとも吾人が歴史的研究にてか、又は現存の未開人の研究より得た所に於ては、單に潛勢的に存在するのみで無く、顯勢的に明かに或

る種の宗教的要求の顯現の存するを知り得るのである。

未開人に教育ありや。或る種の宗教的要求が彼等に存在する様に教育も或種のものが存在するのである。非常に廣義なる教育である。即ち無意の感化又は生活様式の訓練、儀式の習得等の如きである。此の事は前にも述べて置いたから茲には省略する。

宗教と教育とは如何に關係せるか。未開人の宗教は概して言へば生活即宗教であつたと言へる。彼等は萬物萬象を神化したのである。萬物萬象を離れては生活し得ないものであるから、生活即宗教的生活であると言ひ得る譯である。又生活現象其の物も萬物萬象の一なるが故に、宗教的のものであると定め得。故に生活即宗教生活であつたと言へやう。未開人に於ては實生活其の儘か教育である。實生活を指導するといふ一段高位から割り出された教育は無いのである。故に生活即教育であつた。生活其の儘か教育であつて、生活は宗教的生活であるとすれば、彼等の教育は宗教的教育であつたと言ひ得るのである。これを事實に徴するに彼等の生活の中心は何等かの意味での神に對してこれを汚さざると共に信仰し尊敬する事であり、汚さざらんが爲めには種々の禁斷が設定され、尊敬の意味で種々の儀式が行はれた。一言にすれば、彼等の生活は神への奉仕生活であつたのである。而してそれ以

外は生活の支配原理を有せざるが故に、子弟を訓練し教化することの中心は、神への奉仕生活を訓練する事であつたのである。然しそれは彼等の宗教彼等の生活が理性的には極めて下等なものであつたと同様に、彼等の教育も極めて理性的には原始的のものであつたのは勿論である。

未開人の間にかゝる意味で存在した宗教的教育は、彼等の子孫が自然の理法によつて、次第に理知に目醒め、自我の自覺を呼び起すに伴つて、次第に形を變へて發展しつゝ、現代に至つたのである。即ち宗教の本質の解釋が次第に異り、教育の意義が次第に狹義に解せられて、宗教と教育は明瞭に區別せられると共に、教育の眞義を發揮する爲めに、宗教の原理を取入れ、宗教の要求を徹底せしむる爲めに、教育の力を借りる、といふ事になつて來たのである。區別せられたとは言へ、宗教も教育も人間の理想要望を根據とし、人生を理想化せんとするものなるが故に、此の意味に於ては全く同一性質のものとも考へ得るのである。然し各々特殊の分野と特殊の方法と、特殊の價值とを有するものであるが故に、一方を以て一方に換置へ、又は全く一方を服従せしむべきものではない。人間は本性的に宗教的希求理想の要望を有するものであるから、生活は全く宗教と没交渉であり得ない。生活の指導であり、人間の理想化を目的とし、更に本性に於て理想的活動たる教育は、常に宗教と提携して來たの



である。全く宗教に無縁であつた教育は無かつたと考へられるのである。然し時に宗教が教育を掩ひ或は教育が重要原理を宗教に求めた等の如く、主として宗教的に教育が行はれ、教育學が建設せられてゐるのである。かゝるものが謂ふ所の宗教的教育乃至宗教的教育學說である。

次に希臘時代よりの教育に於ける教育と宗教との關係の大略を考察する。隨て宗教的教育についての歴史も含まれて來る譯である。

希臘羅馬時代の教育は既に宗教とは獨立せるもので、宗教的生活の爲めの教育でなく、希臘に於ては現實的なる人間諸性能の調和的發達、即ち美的人格を以て教育の理想となしたのであつた。然し希臘民族が決して宗教を有せずとか、宗教を尊重しなかつたと言ふのでは無い。彼のオリンピック大祭は實に彼等の宗教儀式であつたのだ。然しアリアン族の宗教は我國の神道の如きもので、一種の祖先崇拜教であり、神は神格的神でなく、人格的神である。隨て非現實的の宗教で無くて、現實的・家族的なる宗教であつた。而して希臘の教育はかゝる神の爲めに、かゝる神的人格を得せしむる事を目的として行はれたと云ふよりは、寧ろ美的・調和的・現實的人格の完成を目的として、寧ろ宗教から獨立的に行はれたと考ふ可きものである。然し宗教を排斥し否定したもので無いのみか、一面宗教と合體

して詩歌體操の訓練が行はれたのである。羅馬の教育は概して謂へば、政治的・公民的・實際的・道德的であつて、主意的であり、宗教的・主情的では無かつた。

中世紀の教育は教育理想に於て、教育の實際に於て、全く基督教的（即ち宗教的）のものであつた事は誰も知る所である。寧ろ中世紀に於ては教育が宗教的になつたのでは無くして、宗教の爲にのみ宗教有るが故にのみ、教育は在り得たので、それ以外には教育存在の理由は無かつたのである。故に徹底的宗教教育はこれを中世紀に求め得られる。即ち中世紀の宗教教育は模型的の宗教教育である。

かゝる意味から吾人は更に詳しく中世紀の教育を考察せねばならぬ。

第一、基督教の主旨は如何なるものか。基督なる語は本來ヘブライ語の「救濟者」を意味する語なるが、後ちイエスの固有名詞となつた。基督は猶太のベテレヘムに生れた。父はヨセフ、母はマリヤと呼んだ。基督は幼時寺院に於て猶太教的宗教教育を受けた以外に、大なる教育を受けない。而も其の天才は彼をして救世主とならしめた。三十歳にして布教傳道の途に上り、猶太教より異端者とせられて、三十三才遂に聖く潔く十字架上の露と消へた。布教傳道僅に三年餘、而も目に一丁字無きガリシヤの漁夫をして崇高なる宗教家・思想家たらしめたのみならず、其の教は全世界の人心を慰撫し全

人類に聖き光を與へ、永遠不朽の名を残した。

基督教の教旨は如何なるものかといふに「在天の神は罪深き人間をも、子の如く博く深く愛する。人類は其の意を體して、誠心誠意神を敬愛し、同胞を愛し、罪を悔ひ改め、以て父たる神に事ふべし」と言ふのである。其の人生觀は、宇宙の根元は神である。人は本來は神の子として、善美聖なる者である。神が其の性を顯現せるものが、人間である。故に凡ての人は貴賤貧富男女の差別無く、全く一樣なるものである。然し人間は宿罪を有する。宿罪は肉體的基础にかゝる。故に肉身活動を否定し禁壓し以て原罪を滅却し、清き神の世界に入る可し。との教へである。

かゝる人生觀・倫理觀より演繹せらるゝ教育は、現實否定、人間性の禁壓、平等的世界的のものである。中世紀の教育は實にかゝるものであつた。

基督教教育は、基督が傳道に着手した時から始つたものではあるが、これが學校教育的形式を取つたのは、西曆第二世紀の頃からである。カタクメナートである。目的は基督教徒を養成するに在つて純粹なる宗教學校である。やがて基督教が獨立し得て後、紀元三一三年以後に於て、基督教學校が完備に向つたと考へてよい。此の種のものの中、アレキサンドリヤの問答學校は有名なものである。

而して此の宗教學校は將來の基礎となつたものである。かくして單に基督教徒の子弟を對象とし純宗教的教育を施した所の宗教學校は、やがて一般子弟を教養し、これに神的人格を得せしむるを目的とするものを出すに至つた。稍一般教育化し、更に進んでは一般現世的諸徳諸能を授得せしむるを目的とする、普通の教育に化し、宗教は唯倫理的教科として取入れらるゝに至つたのである。こは勿論文藝復興以後の事に屬する。次に基督教教育の教育方法を檢するに、教科教材としては、聖書・讚美歌、を中心とし、これに配するに、七個の自由教科即三科（文法、修辭、哲學）四科（算、音樂理論、幾何、天文）等を以てした。殊に音樂、天文が重視せられて、他は餘程輕視された。音樂、天文が重視されたのは、全く宗教上の必要からである。教授は主として問答に依り、訓練は極めて嚴格にして抑制的であり、鞭撻は訓練の影の如きものであつた。監禁・絶食等の強懲罰も盛んに行はれた。

基督教を哲學的に基礎付け、立派な宗教としたのは所謂教父哲學と稱せらるゝものである。教父なる意味は教理教會の父即ち基督教義の組織者といふが如き意味である。教父哲學者として名あるは、アレキサンドリア教校派のクレメンス、オリゲネス、ニカイア會議（基督教が羅馬國教たるに至り小亞細ニカイアに牧師を集めて宗教會議をなし、教義の確定を企てた）以後としては、彼のアウグステ

イノスである、教父哲學は基督者の従僕であつた。哲學は宗教の隷屬者の位置を取つた。

かくして中世紀は全く宗教時代であり、僧侶教會全盛で、哲學者も國王も藝術家も皆宗教の名の下に於てのみ生命を持ち得たのである。これ文化上の暗黒時代と稱せらるゝ所以である。何ぞ教育のみひとり超然たるを得んやである。教育も全く宗教の下に於てのみ、教育たり得たのであつた。

文藝復興は根本的に宗教主義に反對したものであつたが故に、其の教育も根本的に宗教主義に反對したのである。然し教育の實際界は未だ宗教的のものであつた。思想と實際とは全く同行し得ないものであるからである。文藝復興の基調に立つて、從來の宗教を改革し、眞の宗教を再現せんとしたのが、宗教改革運動である。文藝復興が宗教を捨てんとするに反し、其の基調に立つて尙ほ宗教を改革せんとしたものであるが故に、一面文藝復興的であると共に、一面中世紀的である、然らば宗教改革時代の教育は如何。

此の時代の教育は眞正なる意味の宗教主義であつた。然し中世紀の宗教教育の如く、個人の現實的諸性能を全く禁壓し去るに非ずして、個人の自由、個人の覺醒を基礎に豫定しての神本主義的教育であつた。これ文藝復興の精神の現れである。中世紀の教育が自然科学に一顧の價値をだに與へざるに

反し、神を認め得る爲めとは謂ひ乍ら、自然科学を重視してゐるのである。その他中世紀の教育が世界主義にて、國家を認めざるに反し、此の期の教育には國家主義的思想を認め得るのである。かく宗教教育には相違なきも、中世紀のものよりは著しく趣きを異にするのである。ルーテルはその代表者である。

十七・八世紀は全く排宗教主義、排未來主義、排神本主義、排主情主義、の時代であつた。即ち實利主義・現實主義・經驗主義・主知主義・人本主義である。ベーコン、ロツク等は實利主義・經驗主義・主知主義の代表者であり、デカルト、ライブニッツ、等は人本主義・主知主義の代表者である。然し此の期にも宗教主義の教育意見を持つたものが随分有つたが、中世紀の如く目的方法全部、及び禁壓的非現實的なものでは無くて、多くは究竟目的を神乃至神的に置くに止まり、他の部分は時代の精神たる人本的・主觀的・經驗的理性的、のものであつたのである。コメニウス、ローラン、フランケ、等が此の種教育學說の所有者である。

十九世紀の教育思想は其の初葉に於ては唯美的・唯道德的であり、中葉以後は唯物的・實利的・自然主義的・自由的・國家主義的のもので宗教主義とは全く相違せるものである。然しこれは一般にか

く看ひ得るので、特殊的には宗教主義の教育説もあるのである。然し長年月の試練を経て居るが故に決して中世紀的のもので無く、十七・八世紀の宗教主義の傳承に加ふるに、新人文主義、歴史主義、國家主義、自由主義、等と相提携し、唯だ最高目的として神を置くに止め、教育方法等は全く經驗主義・自然主義的・個性尊重的のものであつた。即ちフレイベル、シユライエルマツヘル、等が此の種の思想の代表者である。

現代即ち廿世紀の文化の主潮は、十九世紀後半より發展し來り、現代に至つてその華を開いた新理想主義の思想である。新理想主義が、主知主義に反對し、主情意主義に立つ點、及び現實的一面を認めぬは認めるが、唯だ將來の理想界を要望する意味で、將來、理想發展の基礎としてのみ、現實を價值ありとする點、は共に宗教主義と相容れ得ないものでは無い。特に新理想主義が、自然主義、唯物的、享樂主義、實利一面主義に原則的に反抗し、かゝる文化乃至教育を正當に非すとなし、精神主義理想主義、倫理主義、を以て此の惡文化を改革せんとして居る所は、一面に於て藝術主義の高調を來し、一面には確に宗教主義の復活又は新生を來して居るのである。現代の新しき問題は、藝術主義の再興又は新生と、宗教主義のそれとである。故に教育に於ても又宗教主義的教育が、新しい、意義と

力と任務とを以て現れて來て居るのである。殊に現今我國の教育上の一注意點は、確かに此の方面に在ることを考へられる。三教合同問題、歸一協會の問題、宗教教育に關する著述等は、何れも之を物語らざるものはない。

## 第七 實際的教育學說の歴史

實際的教育學說とは教育考察上の實際主義に立ち、現實生活を完全に爲し得る實際的人物を教育理想上の人格と爲す教育學說である。隨て實生活上の實技實能を教育上重視するものである。又實際的人格を造る爲めには、實生活其の儘の形式中に於て、其の生活を實際に生活せしむ可きであるとなす態度にも出るものである。教育考察上の實際主義は、教育說の内容に現はれて叙上の如きものを造ると共に、一面教育學其物の構成方面に表れ、教育學は教育の實際に直ちに役立つもので無ければならない。彼の普遍的一般的教育學の如きは無用の長物であるとなす、實際的教育學をも生んでゐるのである。此事の詳細は「澤柳氏のエデュケーション」を参照すること。

空間關係を超越して教育事實の存在と其の傾向を見るのに、教育事實の存在した當初、即ち未開時代の教育は、實際的であつたと考へられる。未開人の生活は其の各方面に於て全く現實的一面のものである。祭神儀式の傳習、衣食住の獲得行爲の教授等が主なる彼等の教育であつたと思はれるが、非實際的なりと考へらるゝ前者も、彼等に取つては衣食住と同様に實際的のものであつたのである。即ち彼等の生活は實際的一面に限られて居り、人格裝飾的意味の生活は無かつた。然るに次第に發達して外界順應の習慣化、自覺の深化、社會生活様式の複雑化等を來し、生活は多樣深義となり、單なる現實生活のみに満足し得ず、茲に興味の生活、裝飾的生活、未來觀念による種々なる生活等を産み、隨つて教育も實生活的教育にのみ止らず、それ以外の趣味的・裝飾的・宗教的（未來的なる）教育等が生れたのである。然し人間の一面に現實的生活の嚴存を否定し得られないが故に、文化が如何に開化し、教育が如何に進歩しても、必ず實生活的一面を忘る可らざるに共に、歴史の實際に於ても如何なる時代、如何なる教育學說に於ても、全く實生活的一面を排除したものは無いのである。

希臘の教育は、スパルタに於ても、アテネに於ても、一般に非實際的にして、人格裝飾的、貴族的にして審美的であつたと言ひ得られる。然し羅馬の教育は、一般的に言へば、全くこれに反して實際的であつた。

羅馬人は其の本性に於て意志的、實行的であり、政治的・道德的であつた。即ち一括して實際的であ

つた。彼等が雄辯を尊重したのも決して趣味的に、又は審美的にしたのでは無く、政治的實際的立場よりしたのである。而して彼等の此思想は軍國主義、階級的に支配主義なる現實的権力の慾望と相合して表れ、以て大羅馬帝國を建設したのである。隨て教育もかかる傾向のものであつた。貴族的階級的的教育なりしは、全く希臘と軌を一にするだけ共、其の内容其の主義に於ては、一は審美的であり人格裝飾的であつたのに反し、一は實際的であつたのである。今羅馬主義の純粹性を損せざる羅馬上古の教育思想を見るに、父自らの模範を以て教育の手段となし、父は己れが行く處には必ず子供を伴ひ、以て實地に就いて羅馬市民の生活を見聞せしめた。而も文學的教育は少きのみならず、羅馬市民の生活上不可欠なる十二銅標の讀方・書方を爲さしめたのである。大カトリーの教育方法を見るにカトリーは其の子を家庭教師に委せず、自ら教導した。文法、法律等の外に、投槍、乘馬、水泳、等を爲さしめ、又寒暑に耐へ得るが如き訓育法を取つたとある。以て實際的なる一端を知り得るであらう。中世紀の教育は宗教的教育であり、宗教は其の本質上、非實際生活のものであるが故に、教育に於ても著しく非實際的であつた。既に人間の現實的生活の基礎となる、現實的生物學的諸性能を全然無視せる、禁慾的教育なりしを知らば非實際的たるを知り得る譯である。宗教的禁慾的生活が彼等の

實際生活であるが故に、其の眞な教育は彼等に取つての實際的教育であつたには違ひないが、今茲に謂ふ實際の意味は形式的に適當とか相當とか言ふ意味で無くして、現實的生活、衣食住的生活の意味であるから、中世紀の教育を實際的だとは言へないのである。文藝復興・宗教改革時代の思潮は、中世紀基督教の文明に對して考へれば、彼が神本教、禁慾的なりしに比し、これは人本的、自由的なりしが故に、彼よりも實際的に接近せるものとは考へ得るが、然し眞に實際的だとは謂ひ得ない。寧ろ冥想的・審美的傾向、即ち反實際的であつたと考ふ可きものである。けれ共既に人を神の國、禁慾壓迫の國より救ひ出した所は、反實際主義より實際主義への轉回の機因を作つたものと言ひ得るであらう。

十七世紀に至り、文藝復興に由つて拘束の網を破壊して出た人間は、一意美的享樂に耽つたが其の自由の精神、批判的覺醒は遂に人間をして、自然界の理的開明を起さしめ、自然科学的知識及興味及研究法の昂進を來し、茲に十七世紀の實利主義、即ち實際主義の思潮及び文化を打開し、教育も實利主義・實際主義を主と爲すに至つたのである。更に少しく詳論せん、文藝復興宗教改革は自由開放の要望の實現あり、自由開放の要望は自我の合理的自覺、批判的意志の活躍に依存するものであ

る。自由開放、合理主義に相合して人間生活の現實面の打開擴充を要求し、其の要求は當然自然界に向ひ、自然界の開明となり、經驗的知識の獲得及科學的發見となつて實利主義を燃上せしめ、更に此の研究の態度が物其物に向はずに、研宄法其の物に向つて、自然科學的方法の發見となり、これ等が又反對に主觀に作用して愈々經驗的理性主義、唯物的自然主義、個人的實利主義を昇騰せしめたのである。經驗的知識の獲得はコペルニクスの地動說、ギルベルトの磁石の法則、ガリレオの新物理學組織、ケプレルの天體運動の法則、其他動物植物學上の知識學であり、科學的發見は印刷術の發見顯微鏡の發明、寒暖計の發明、アメリカ大陸の發見等である。自然科學法の發見は彼のベーコンの歸納法の發見である。かゝる時代の教育は勿論かゝる時代的のものである。即ち十七世紀の教育は實利か否かを立場として見る時には明かに大實利主義であると言へる。これを有名なる教育家の意見についてみるに、モンテーニユの自國語尊重主義、ロツクの知育論に於ける利用厚生主義。ラトケ、コメニウスの教授法上の實地生活主義（直觀主義）殊に فرانケの實科學校の創始等は、明かに此の事實を證明して餘りあるものである。

十八世紀は十七世紀に盛なりし經驗的理性主義が、愈極盛を極めそれが一種の生活態度にまで至り徹底的に表れてゐる。極致は轉回を望む。十七世紀よりも經驗的唯物論的方面を稍忘れ合理的一面に強く走り、十七世紀以來の合理主義を批評的に見る事に依つて更にそれを活化したるが如き觀を呈した。然し十七世紀主義が棄てられたのでは無く、實利教育も明かに存在したのである。即ちバゼドウザルツマン、カンペ、トラップ等の汎愛派の教育説は明かにこれを證據だてる。彼等の教育目的は兒童をして有用なる愛郷者となし幸福なる生活を營ましめるに在りとなし、教授方法としての直觀主義教材に於て科學重視、實科的教材尊重視、體育重視、等をなすは何れも實際主義、實利主義、と見得らるものである。

十九世紀初葉は、十八世紀末期よりの反啓蒙的反合理的思潮が啓蒙主義の思潮に取つて代はつたと見得られる。新人文主義の時代である。新人文主義は人文主義の如く形式的尙古典主義に非ると共に前主潮たる經驗的理性主義の長所とする合理的要求、實利實際主義を全然放棄せず、これを包擁して更に高く出でるを考へられるけれども、既に包擁せられ從屬者たる合理的要求、實利實際は、決して昔日の面影を持たないのである。然るに、十九世紀中葉に至つては世は再轉し、茲に十七八世紀より更に強調なる自然科學主義、物質萬能、自然主義的生活觀を來したのである。蒸氣・電氣の發明、

其の他殆き無際限なる科學的發明が行はれ、自然科學は勇猛に自然界の打開究明に當り、産業は機械化され、分業盛となり、貧富の懸隔は愈々大に、生活は困難に、といふが如き有様となり、自然科學は世界を全く解明し盡すかの如く思はれ、經驗的人生觀極度に發揮され、爲めに唯物主義となり實際主義實利一點張りこなつたのである。隨て教育も實利的實際的教育となり、實科教育職業教育等の隆盛を來し、甚だしきは教育はパンを得る爲めに役立つものであると迄考へられるに至つたのである。之を代表するものはスペンサーの教育說である。十九世紀末葉より現世紀に亘つて表れ、徐々に思潮の中樞たらんとしてゐる新理想主義の思潮は、前期の自然主義、唯物主義が、非理想的、非人格的なる點には全く反對するけれ共、それが主意主義に立ち、活動主義なる一點に於て、兩者は立場を異にする共通相を表して來るのである。共通相とは人生を發展的・生活的に見る事である。然し新理想主義の發展的・生活的見解は、何れも理想的のもので、實際的性質は持たないが、自然科學主義の發展的・生活的見解は、經驗的・心理的なるが故に實際的・實用的・實利的見解となるのである。これを代表するものはブラグマチズムであり、此の主義の教育說を代表するものは、米のデューボイである。而して現代は自然科學主義と新理想主義の對立時代であると共に、唯物的生活、經濟的生活の基調、等は十九世

紀中葉の傾向と毫の差も無く、實際に於ては愈々此の方面は此の方面へ強く走りつゝあるので、教育界に於ても實際主義、實利主義の教育は随分強力に存在し發展しつゝあるのである。一面これを補助してゐるのは、社會的教育學說が、社會を重視し社會的關係より教育を考察し、陶冶の理法を定めんとしてゐる事である。かくして現代の教育學說及び教育實際乃至一般世人の教育價值認定等には、教育を實際的に眺めるのが極めて有力強調に動いてゐるのである。教育を受けないと喰へないから、といふ聲は少くとも日本現代の教育觀を代表する聲であらう。



## 第八 國家的教育學說の歴史

國家的教育學說とは、教育理想決定上、「國家」とふ觀念を至上觀念となす教育學說である。換言すれば、國家の隆昌發展の爲といふ立場より教育を考定し、國家を度外視する教育をば排斥せんとする教育學說である。かゝる立場の教育は歴史上如何に變化發達して來たか、次に之を述べることにする。

一般的に考察するに、國家的教育學說なるものは、少くとも各民族の覺醒あり、民族の生活様式が國家てふ形を取りたる後、即ち國家生活の形成せられたる以後に於て發生せるものなりと考へ得らる可きものなるが故に、未開半開の時代に於ては、此の主義の教育思潮は存在せざるものと見なすことが出来る。然し乍ら、國家生活の形式の内面に流るゝ國家的精神、國家生活の内面的本質は、未開半開の民族生活中にも存在することは明かである。團體生活、集合生活の様式が彼等の中に在り、集團

の各員が相互に希求して而も外面に投出する所の、中心勢力、統一體の定置は、彼等の生活中にも明瞭に表れ居り、各員は此の一統一體を自己の支配者と設定し、其の指揮命令に服従し、以て自己を保全すると共に自己所屬の團體の保全を計るのである。かゝる生活様式中に流るゝ精神は實に國家生活の本質の胚珠なると共に、兩者は同質のものであると考定せらるゝのである。此の意味より推す時には、未開半開の民族にも、國家的なる教育のありたるを思ひ得可きも、然れども茲に言ふ所の成形的なる國家的生活無く、隨つて茲に謂はんとする、國家的教育なるものは存在せずと見得られるのである。而して國家的教育の隆昌衰亡は、國家生活のそれと殆ど同一軌道上に在る。國家意識旺盛なる民族、國家生活の隆昌なる時には、國家的教育の隆昌を見、然らざればその反對を見るのである。

希臘の歴史を見る時、彼のスパルタ人の國家意識の強烈にして、スパルタの都市國家が如何に希臘半島に於て光彩を放ちたるかを知るのであるが、かゝるスパルタに於ては、勿論國家的教育の隆昌を顯現したのである。否、スパルタ教育は或る意味に於ては實に模型的國家的教育である。由來スパルタ人は個人を以て全然國家の從屬物となし、個人には何等の意義も權利も無く、唯唯國家に絕對に隸屬することによつてのみ、人間は存在し得ると考へたのである。個人の生殺權すら國家の手中に在つた

のである。故にスパルタの教育は、國家の名に依つて國家の爲めに行はれたのである。隨て強迫的形式の教育であつたが、スパルタ人には決して強迫でも何でも無かつたのである。國家の爲めに自己の生命を喜んで捧げ得る者を國家の法律に依つて養成する。これがスパルタ教育であつた。而してスパルタは武を以て光を放ちし國家なるが故に、スパルタの國家的教育は、軍國的・尙武的國家主義の教育であつたのである。軍國的國家の理想の一員の養成、これがスパルタ教育のモットーである。スパルタをしてかゝる教育を必要せしめたるは、僅々九千のスパルタ人が、内には十二萬の土人、廿萬の奴隸を支配し、外に對しては外敵と對せざる可らざる状態に在つたが故である。

アテネの教育も亦國家的教育であつた。然し國家的なる點に於ては一致するも、性質色彩を異にしてゐる。アテネの國家的教育は、一言にして示せば、文化的公民的國家主義の教育であつた。此の點はスパルタの軍國的國家主義と全く相異なる所である。蓋しアテネに於ては、個人を尊重し其の諸性能の自由なる發達を期せしむるは、單に個人の完成の爲めのみならず、實に國家の繁盛を來す所以なりとなし、個人性の發達の中に、社會性の進展發達を見出し、個性と社會性との圓滿に調和せるを以て理想的人格、國家的人格となしたのである。而してこれはアテネ人の自由尊重と社會組織が、民主的

なりしより結果せるものである。アテネの此教育思想を代表するものは、プラトーンの教育説である。ローマの國家的教育は如何に云ふに、羅馬人の頭腦に深刻せられたるは「永遠のローマ」祖國の觀念であつた。羅馬に於ては個人は國家の一分子と見られ、直接國家に關係なき生活は全く無價値せられたのである。羅馬人の生活及び性質の特色は、政治的・軍事的なる點に在つた。故に彼等の國家主義も亦此の着色を帯びて、政治的・軍事的なる愛國となつて表れたのである。即ち政治及び軍事を通じての愛國主義である。教育も亦政治的軍事的なる國家的教育であつた。

文藝復興期・宗教改革期・十七八世紀、はスパルタ、アテネ、羅馬に發達せる國家主義が、基督教のコスモポリタニズム即ち世界主義の爲めに壓伏せられ、犠牲的精神に代ふるに、自由又は利己を以てせし時代である。然し世は一大轉開をなし、十九世紀に入り國家主義は、昂然として擡頭するに至つた其の理由所以とも見る可きものの主なるものは、一はナポレオン戦争、二は個人主義（利己主義）、自由主義の行詰つての開轉、三は民族生活意識の確立旺盛、四はヘーゲル哲學、進化論、五は社會學研究の結果、社會有機體説、國家實在説等の唱導せられたる事、等を擧げることが出来る。而して此の世紀の國家主義は、スパルタ、アテネ、羅馬等の半盲目的なる國家主義に比して、著しく學理的根據を有

し、自覺せる民族意識を基礎に持つもので、眞義を發揮せる國家主義なりと稱し得可きものである。教育に於ても勿論國家的教育がかかる原因とかゝる根據とを持つて表れ出たのである。其の實際に表れたるものは、義務教育の制度である。現今各國の教育は大體に於て凡て國家主義的教育なりと謂ひ得る勿論其の具體的表現形式等は異れども。今後國家的教育は如何になり行くならんか、を考ふるに國家を通じてのみ世界に貢獻するを得、と言つたナトルプの言の如く、國家的教育を通じてのみ、世界の文化の發展は可能なる可きにより、國家的教育は愈々益深化せらるることと思はれる。

### 教育學說の論理及びその批判畢

大正十三年六月二十日印刷  
大正十三年六月廿五日發行

版權所有  
印檢



教育學說の論理及其批判 定價金參圓

著 者 渡 部 政 盛

發 行 者 照 井 健 伍

印 刷 者 荒 井 東 之 助

印 刷 所 荒 井 印 刷 所

東京市神田區南神保町

發 行 所 太 陽 堂

電話九段一九四四番  
東京三一一二番

刊 新 最

宗 教 と 教 育

文 成 城 小 學 校 主 事 士 小 原 國 芳 先 生 著

四 六 版 全 一 冊  
定 價 一 圓 五 十 錢  
送 料 十 錢

著者は今や初等教育界の劈頭に立つて、その根本的轉回を主張し、叫び、怒り、狂ふてゐる。魂の問題を忘れた教育界は、いたづらなる外的整理と形式的複雑化に没頭しきつてゐる。根本に歸らねばならぬ要求に、健げな努力をしてゐる人達も、荒漠たる原野に行きくれてゐるのであらう。われ人ともに生命の泉に無限なるもの、存在を求めやうではないか。「教育の根本問題としての宗教」を著した著者の、其後の思索と精進との結晶が即ち本書一卷である敢て御一讀を薦む。

版 六 評 好

哲 學 綱 要

文 學 博 士 桑 木 嚴 翼 先 生 著

菊 版 上 製 箱 入  
全 一 冊 四 三 六 頁  
定 價 參 圓 貳 十 錢  
送 料 二 十 三 錢

現 代 哲 學 界 の 權 威 書 !!

本書は前後二篇に分れ前篇に於て哲學の概論を該博なる著者の新らしき見解に依り秩序的に説き簡明に組織したるものなり。後篇は現代の哲學と題し哲學界現時の諸問題、傾向等を論述せしものにしていかにも論理整然、批判透徹、斷案明なり。論述の方法また簡明にして難解の點を見ず、眞に類書中の白眉と云ふべし。

内容概略—哲學の由來—哲學の概念—哲學の構成—哲學の問題 □現代の哲學—規範と規範學—歴史哲學の問題—自然科学者の哲學觀—哲學方法論—倫理學說と實驗倫理學—矛盾の原理と哲學—□歐米哲學界の印象記

農學士 大町文衛先生著 (改訂増補新版)

### 最新 自然科學十講

- 第一講 宇宙進化論
- 第二講 電子論
- 第三講 相對性原理
- 第四講 量子論
- 第五講 放射能元素
- 第六講 膠質化學
- 第七講 遺傳學
- 第八講 生物進化論
- 第九講 內分泌論
- 第十講 免疫血清學

十九世紀に築き上げられたる自然科學の殿堂は廿世紀になりて再びその根底から改造される運命に至つた。その斬新にして驚奇すべき研究、學說の中人間の生活並に思想に最も重大な意義ある十個の學說を採りて極めて平易に最も興味ある筆を以て一般讀者に紹介したものは本書である。科學が進歩し一般に普及されたる今日に於て與へられたる最高の解釋とも稱すべき此等の新學說は一般人の常識としても缺くべからざる知識である。而して眞の意味に於いて通俗を旨としたる本書は普通讀物として、また理科教育の參考書として最も適當のものである。

口繪 遺傳の實驗  
全一冊 五五〇餘頁  
定價 四圓三十錢  
送料 貳十五錢

文學博士 佐々政一先生著

### 近世國文學史

菊版上製箱入  
全一冊 三三〇頁  
插繪寫真版六十三  
定價 參圓三十錢  
送料 二十三錢

博士が在世中各大學に於て近世文學を講ずること十余年、本書は其濫著を傾倒して成れるもの、即ち京阪時代より江戸時代を経て近世に至る、詩歌小説戯曲は元より川柳落語俗謡の徴に至るまで一々評臨して洩す所なく、更に近代の文藝をも併叙せる著者の識見は、日本文學の研究上眞に重要缺くべからざるもの也。

改 刷 新 刊

松平道夫先生著

# 最近趣味の發明界

一名 現代文明の概観

偉大な發明は時代の文明を支配する。而して現代文明の趨勢を知らんと欲せば如何なる發明發見がなされたの又なされんか、あるかを知るより外はない。この意味に於て發明に關する書物は現代人にとつて最も重要なもの一つである。本書は趣味と參考の二方面より多大な自信を以て編纂されたもので、その納むる所悉く現代發明界の精銳を網羅し、加之多數の挿繪及寫眞は總て最新のもの、此種の書としては英、米、獨、佛を通じて最も新らしきものである。現代文明の潮流に連れざらんとする人に一本をおする。

内容一 班一 現代文明の基礎としての動力。一、蒸汽機關。二、瓦斯機關。三、石油機關。四、蒸汽タービン。五、發電機。鐵道の沿革。電車の發明。電氣鐵道。高速鐵道。單軌鐵道。地下鐵道。自動車。船舶の今昔。コンクリート船。潜水船。飛行機。飛行船。壓搾空氣の利用。電氣學の進歩。電信及電話。無線電信。無線電話。電灯及電熱。最近の印刷術。特殊放射線の發見。最近天文学の諸裝置。顯微鏡の變異。寫眞術及特殊寫眞。以上二十三章二百廿九項目挿繪百七十八餘

口繪及寫眞百七十  
菊判上製箱入  
全一冊三五拾頁  
定價參圓五拾錢  
送料廿三錢

## 最新刊

松平道夫先生著

# 最近趣味の發明界

(日常機械器具篇)

本書は「趣味の發明界」の續編である。該書に於いて著者は現代文明の源泉をなす各種の偉大な發明を明快な筆致に依つて述説して行つたが、更に本書では日常我々の最も接近し廣く應用せられつゝある幾多の有益な發明品に就いて、趣味溢るゝばかりの筆を以て多數の挿繪と共に説いて行つたもので一般の家庭は云ふに及ばず、各學校等に於ても必ず備へて置かるべき良書である。「趣味の發明界」を讀んだ人は更に本書によつて現代に於ける機械應用の文明を一日豁然に知ることが出来るのである。

内容一 班一 時計。蓄音機。タイプライター。樂器。縫紉機(ミシン)。農業用具。唧筒。消火器。家庭に於ける電氣器具。附録一 工作機械一 班一 製造機械一 班一 運搬作業機械一 班以上十二章百二十餘項目挿繪二百三十餘ヶ

口繪寫眞二三〇餘  
菊判上製箱入  
全一冊三六〇拾頁  
定價參圓五拾錢  
送料廿三錢

## 最新刊

工英 學士國 關 口 定 伸 著

### 最新 趣味の電気學

電気は我々の日常生活に大なる恩恵と危険とを與へるものであるが多くの人の此の知識に乏しきは眞に憂ふべきことである、著者は現今多数の類書中未だ此の意味での最新、通俗、且つ興味ある筆になつた著書の絶無なるを遺憾とし非常な苦心と努力に依り公にしたもので、本書には最新の學說及實例を悉く網羅し之れに多数の寫眞を加へり人にも極めて分り易く又趣味ある一般的物としても満足せられ、しかも知らず知らずの間に電氣の全班に通じ得ることを目的としたものである、電氣關係者は元より廣く家庭の人々にも一讀を薦むる次第である。

内容一 班一 動力としての電氣一 電氣と索引一 電氣鐵道一 電氣と照明一 電熱の利用一 電氣化學一 熱と電氣一 電氣と氣象學一 雷と電氣一 儲蓄機器一 陸上電信一 海底電信一 無線電信一 電話一 興味ある實験一 電氣測定一 電氣設計一 電氣と生理一 陽電氣と陰電氣一 最近の學說一 目錄發明家と其の發明器具、絕對單位について

口繪及寫眞冊五ヶ  
菊一判上製箱入  
全一冊三三〇頁  
定價參圓  
送料廿三錢

### 最新 刊

松平道夫先生著

### 最新 趣味の化學工業界

一名 化學と現代文明

近代化學の偉大なる價值は、一つにその應用方面にある。即ち今日の化學工業の隆盛は化學の成功に對する凱歌であつて、化學が如何に人類の幸福に貢献する處が多いかを物語つてゐるものである。本書は現代に於ける化學工業方面の偉大なる發明を網羅したものであつて、化學應用の近代的成果を豊富な挿繪に依り最も平易に説明したものである、現代に於ける斯界の知識を求めんとする人の最もよき參考書であり、また教科書である。

菊版三八〇頁上製  
口繪及挿繪百冊餘  
定價參圓五拾錢  
送料二十四錢

### 最新 刊

◎ 録 目 版 出 堂 陽 太 ◎

刊 新 最

内ル  
山ツ  
賢ソ  
次一  
氏原  
譯著

人間不平等起原論

付 學 藝 論

四六判 上製箱入  
全一冊 二六〇頁  
定價 貳圓  
送料 十八錢

カントを動かして理想主義哲學を大成せしめ、ゲーテ等に影響してロマン主義の源流となり、社會構成の理法を瞭にしてフランス大革命の動因となつたルツサウの功績に就いては今多言するを要しない。彼は實に近世文明史上の一大紀念碑だ。茲に譯收した二篇は以つて彼がフランス文壇に、吾世界の思想界に不可動の地位を獲得した名篇で、彼が多年のロマン的生涯程に育み來つた「自然に選れ」の第一聲だ。人間不平等の起原を探り、學藝が道徳に及ぼす影響を究めて、彼が豊にして瀟なる情操を以つて人生に注ぐ熱愛は虚構浮動した現代生活更新の要素だ、新生活建造の動因だ。



253  
298

終

